



<書評> 永田佳之編著・監訳、曾我幸代編著・訳  
『新たな時代のESD サステイナブルな学校を創ろう  
: 世界のホールスクールから学ぶ』

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2020-08-18 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 吉田, 敦彦 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10466/00017007">http://hdl.handle.net/10466/00017007</a>

書評 永田佳之編著・監訳、曾我幸代編著・訳

## 『新たな時代のESD サステイナブルな学校を創ろう —世界のホールスクールから学ぶ—』

(明石書店、2017年)

吉田 敦彦 大阪府立大学

YOSHIDA Atsuhiko

「国連ESDの10年(2005~2014年)」の後半から「ポストESD10年」に入った現在、ESDの「ホリスティック」な特徴がユネスコの各種会議や先進スクールでますます強調され(21頁)、世界各地で実践に移されていることを、国際ドキュメントを詳細に検証しながら紹介したのが本書である。とくに「ホールスクール・アプローチ」を実践する「サステイナブルスクール」について、豊富な実例と貴重な資料(評価ツールの翻訳も含む)が掲載されている。

本書を通読すると、本学会の「ホリスティック教育/ケア研究」という課題が、いかに21世紀前半の国際社会の歴史的動向に即応するものであるか、説得力をもって理解できる。この書評では、3つの観点、すなわち「ホールスクール・アプローチ」、「ESDのエッセンスとしての文化と変容」、「サステイナブルスクールの中心概念であるケア」という観点から、その意義を確認したい。

1)まず、本書の副題にも採用されている「ホールスクール・アプローチ」。これは、ESD10年の成果を踏まえ、今後の課題としてユネスコが議論を重ねてパブリッシュした方針(GAP:グローバル・アクション・プログラム)において、「機関包括型(Whole Institutional)アプローチ」——学校という教育機関では「ホールスクー

ル・アプローチ」と呼ばれる——として提示され、現在では広く国際的に共有されてきた(1章・2、2章・2)。著者は、「ホールスクールの「ホール」の語源は「ホリスティック」に通じます。その意味するところは「トータル」と同じように思えたとしても根幹を異にします」と述べ、それが断片的な部分の総和(トータル)以上の、質的に新たな変容を生み出す全体性であることに注意を促している(70頁)。つまり、ESD10年のあいだに、カリキュラム(日本の場合は学習指導要領)の中に環境問題やエネルギー問題など持続可能な社会に向けた教育内容が組み込まれ、授業の中に態度や行動を学ぶ参加型の学習方法(アクティブ・ラーニングなど)が取り入れられてきた。たしかにそれは進展であったが、多くの場合、全体としての学校のデザインや方向付けは変わらないまま、あれこれの単発のプログラムが加算されるにとどまる傾向があった。今後は、学校の方向付け(ビジョン)そのものを据え直し、学校生活のあり方がまるごと変容していくようなアプローチが求められる。具体的な事例が本書では挙げられており、どんなエネルギー源の電気をどのように使用しているか(ex.アシュレイスクール、87-93頁)、給食で、どう育てた食材をどのように食し堆肥化しているか(ex.自由学園、78-83頁)、

生徒や教師のタスクの量やスピードには、持続可能なゆとりや楽しみがあるか (ex.永田台小学校、93-99頁) ——等々を問いかけ、できるところから学校ぐるみで見直していく (できなければ、それが何故なのかを学ぶ)。授業で何を教え、子どもにどんな能力を身につけさせるか、という観点だけでなく、日々の学校の中で、持続不可能なライフスタイル・暮らし方を少しでも変容させていく。それに取り組む大人たちの、いわば後ろ姿から子どもたちが学ぶとき、本物の学びになる。むしろ、なかなか変容できない大人よりも、柔軟に新たな価値や行動様式に馴染んでいく子どもの姿から、大人たちが学ぶことも大きいかもしれない。

2) それは、次にみるように、既存の「学校文化」の文化そのものの変容をめざすことにつながる。著者は、ESD10年の前半から日本ホリスティック教育協会が「持続可能な社会を形成する3本柱である環境・社会・経済を根底から支えるのは、それらの柱をつくる人間の価値観を醸成している「文化」であるという認識」を主唱してきたこと (2007年ESD環太平洋国際会議:ライブラリー⑧『持続可能な教育と文化』)に言及しつつ (39頁)、この認識が国際社会でも共有されてきたことを紹介している。たとえば、そのモデルの中核に「文化」を位置づけた南オーストラリアの「EiS (Education for Sustainability) モデル」、先住民 (マオリ) の伝承文化とグローバル化する文明の共存を模索する二文化主義のニュージーランドにおける「渦巻きモデル」など (第2章-2)。そして文化は、「脱計画性」、つまり成果主義的な目標志向 (「目標⇒計画」) よりも、伝承されてきた文化の (今・ここ) での内発的な展開を重視するプロセス志向 (「方向性 (ビジョン) ⇒デザイン」) のアプローチによって醸成されることも強調する (71-74頁)。

加えて、ここまでの記述でも多用された「変

容 (トランスフォーメーション)」がキーワードとして浮上しているのも、近年のESDの顕著な特徴であることを筆者は随所で明らかにしている。言うまでもなくホリスティック教育論は、「伝達 (トランスミッション)」・「交流 (トランスアクション)」に対する「自己変容」の深さの次元に早くから着目し、ESDにおいても、「浅い持続可能性」に対する「深い持続可能性」 (16頁) を探求してきた。

3) さて、3つ目の「ケア」の観点について。創設された「ホリスティック教育/ケア」学会のチャレンジの一つは、教育をホリスティックに捉えたとき必然的にクロスオーバーする「ケア」との融合的な新領域の創生であろうが、ホールスクール・アプローチによるサステイナブルな学校づくりの中核に、他ならぬ「ケア」の概念が位置づいていることを二人の著者は繰り返し言及している (66、119頁など)。とくに触発的なのは、英国ブレア政権時の「2020年までに全公立学校をサステイナブルスクールにする」という政策で、本書の第二部には、その「ナショナル・フレームワーク」関連文書の翻訳版が所収されている。そこには、「サステイナブルスクールは、「ケア」を学校文化の中心とする学校である」 (135、229頁) と明記され、基本フレームとして、「自分自身へのケア (健康とウェルビーイング)、相互のケア (文化、距離、世代を超える)、環境へのケア (地域的にも地球規模にも)」 (115、128頁) という3つのケアの精神を、学校自体が「ケアリングの場」 (114、128頁) となることによって育む、という特徴を第一に挙げている。私たちの暮らしが持続可能なものになるためには、自分自身を大切にすることができ、目の前にいる人のことも、遠く離れたところにいる人のことも、自文化の人だけでなく異なる文化をもつ人のことも気づかい、そして自分の世代と同じように将来の世代の人のことをもケアできるような、さらには、

人間だけでなくこの地域の、そして地球の環境のことに配慮できるような、そのようなケアの精神が必要となる。だから、子どもたちが日々通う学校のなかで、このようなケアが大事にされる校風(スクール文化)をつくるのが、ESDの大前提になるというわけだ。本書では、イギリスの公立サステイナブルスクールの代表例として、クリスピン校とアシュレイ校を詳しく紹介していて、説得力がある。

持続困難で予見不可能な時代に向け、新たな価値と生き方を切り拓くことができるか。新学習指導要領では「浅いアクティブラーニング」を深化すべく、「主体的・対話的で深い学び」を掲げた。ESDに限らず、深められた変容を生み出すホールスクール・アプローチを詳述した本書は、理論的にも実践的にもこの時代に応答する高い汎用性もつ必携の書であると思われる。